心理動詞を含む文の特異性とその構造

言語学・応用言語学専攻　増山由梨佳

平成１６年１月９日提出

目　次

0. はじめに ……1

1. Belletti & Rizzi 1988……3

1.1. イタリア語の心理動詞における３つのグループ……3

1.2. temere（恐れる）を代表とするグループ１の構造……3

1.3. preoccupare（気にかかる）を代表とするグループ２の構造 ……4

1.4. piacere（喜ばせる）を代表とするグループ３の構造……7

1.5. まとめ ……8

2. 日本語の心理動詞 ……9

2.1. 逆行照応の可能な心理動詞と不可能な心理動詞……10

2.2 「視点」 ……12

2.3. 逆行連動読みの可能な心理動詞と不可能な心理動詞……14

3. 最後に ……19

Appendix. 同一指示と文の構造 ……21

参考文献 ……24

要旨

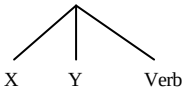
心理動詞を含む文の構造は他の動詞と異なると仮定されていることが多いが、どのような心理動詞がどのような点で他の動詞と構造が異なっているのか、具体的な研究はあまりされてこなかった。そこで、本論文では、逆行照応と逆行連動読みの可能性に着目して、日本語の心理動詞を広く調査した。その結果、心理動詞には正位型、真性逆位型、擬似逆位型の３つのタイプがあることが明らかとなった。その中で、正位型、擬似逆位型は、通常の動詞と同様に、主語が目的語を c-command する構造になっているのに対して、真性逆位型は目的語が主語を c-command する構造になっていると考えるべきであることを主張した。

0. はじめに

この論文では、日本語の文構造の一端を明らかにすることを目指す。従来、日本語の文構造については様々な分析が提案されているが、それぞれの動詞の特性による構造の違いについては、まだ十分に研究が進んでいるとは言いがたい。この論文では、特に、心理動詞と呼ばれる一群の動詞に注目し、その統語構造について考察する。

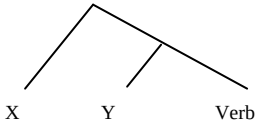
Hale 1980、Farmer 1980 は、日本語は VP 節点を持たず、(1)のように「三項枝分かれ」の構造をしているために、語順も比較的自由であると述べたが、Whitman 1982、Saito 1983 は、日本語の節の構造は、(2)のような「二項枝分かれ」であり、その点においては英語と同じであると主張した。（主語 NP を X、目的語 NP を Y とする。）

(1)



（Hoji 1985:2, (2a)）

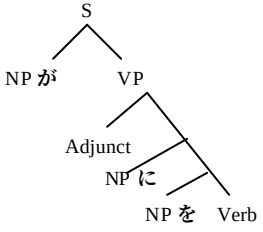
(2)



（Hoji 1985:2, (2b)）

Hoji 1985 は、日本語の束縛関係を調べることによって、日本語の構造は(1)ではなく(2)のように考えるべきであるということを示し、日本語の基本的な文の構造は次のようになっていると主張した。

(3)



日本語のすべての文が(3)のパターンに従っているとすると、「NP が」は常に「NP を」を c-command し、逆は成り立たないことになる。では、次の対立はどのように説明すればよいだろうか。

(4) a. *[$_S$ [$_{NP}$自分$_i$の車を壊した人]が[$_{VP}$メアリー$_i$を殴った]]。

b. [$_S$ [$_{NP}$自分$_i$の車を壊した人]が[$_{VP}$メアリー$_i$を驚かせた]]。

cf. [$_S$ [$_{NP}$ジョンが自分$_i$の車を壊したこと]が[$_{VP}$メアリー$_i$を驚かせた]]。（Saito and Hoji 1983, (14a)）

従来、「自分」は照応詞であり、先行詞に c-command されなければならないと言われている[1]。(3)の構造に従うと、(4a)では確かに「自分」が「メアリー」に c-command されていないが、(4b)では「自分」が「メアリー」に c-command されていないのにもかかわらず、この文は容認可能となっている。つまり、どのような動詞の場合にも(3)の構造になると仮定した場合、(4b)が容認可能であることを説明できない。

(4a)と(4b)の文を見ると、これらの容認性の違いは、使われている動詞が違うことによると考えられる。「驚かせる」という動詞は、「殴る」とは異なり、人間の心理の変化に関する動詞なので、心理動詞と呼ばれることがある。Postal 1971、Grimshaw 1987、Belletti & Rizzi 1988、Kageyama 1997 などにおいて、心理動詞を含む文は他の普通の動詞を含む文とは構造が異なると考えるべきであるということが指摘されてきた。日本語においても、心理動詞を含む文の構造は他の動詞と異なると仮定されていることが多いが、どのような心理動詞がどのような点で他の動詞と構造が異なっているのか、具体的な研究はあまりされてこなかったといってよい。

そこで、この論文では、日本語の心理動詞にどのようなタイプがあるのかを調べ、それぞれのタイプの心理動詞を含む節がどのような構造をしているかを考察する。まず、第１章では先行研究の代表的なものとして、心理動詞を研究した Belletti & Rizzi 1988 を紹介する。Belletti & Rizzi 1988 では、イタリア語の心理動詞には、派生を通じて常に主語が目的語を c-command しているタイプのものと、D-structure において Experiencer が Theme を c-command しているタイプのものがあるということが主張された。このことは、日本語においても、心理動詞にいくつかのタイプがありうるという可能性を示唆している。この考察を踏まえて第２章では、日本語の心理動詞を含む文の構造が通常の場合とはどのように違うのか、分析を提示する。

[1] この仮定については、2.2 節で再考を試みる。

1. Belletti & Rizzi 1988

1.1. イタリア語の心理動詞における３つのグループ

Belletti & Rizzi 1988 では、イタリア語の心理動詞を含む文の構造には３つのタイプがあると述べられている。(5)〜(7)にその代表例を示す。

(5) Group 1 **temere** (fear) class
Gianni teme questo. 'Gianni fears this'

(6) Group 2 **preoccupare** (worry) class
Questo preoccupa Gianni. 'this worries Gianni'

(7) Group 3 **piacere** (please) class
a. A Gianni piace questo. 'to Gianni pleases this'
b. Questo piace a Gianni. 'this pleases to Gianni'

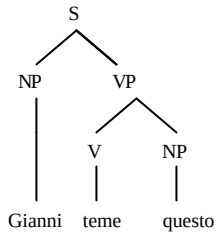
(5)の temere（恐れる）を代表とするグループ１は、Experiencer Verb Theme の語順であらわれる。これに対して、(6)の preoccupare（気にかかる）を代表とするグループ２は Theme Verb Experiencer の語順となり、また、(7)の piacere（喜ばせる）を代表とするグループ３は、Experiencer Verb Theme の語順も Theme Verb Experiencer の語順もどちらも可能である。

では、以下でそれぞれのグループの構造について、Belletti & Rizzi 1988 でどのような提案がなされたかを紹介していく。

1.2. temere（恐れる）を代表とするグループ１の構造

(5)の temere（恐れる）を代表とするグループ１の場合の主語は、基底構造から主語の位置に生成されている deep subject であり、D-structure も S-structure も、どちらも(8)のような構造をしていると分析された。

(8) グループ１の場合の D-/S-structure（Belletti & Rizzi 1988:293, (5))



このタイプの動詞の主語が deep subject であることを示す証拠として、以下のように、再帰代名詞 si を束縛できるという事実が指摘されている。(9)は通常の動詞の場合、(10)はグループ１の動詞の場合の例である。

(9) Gianni$_i$ si$_i$ e fotografato.（Belletti & Rizzi 1988:295, (7))
'Gianni himself photographed'

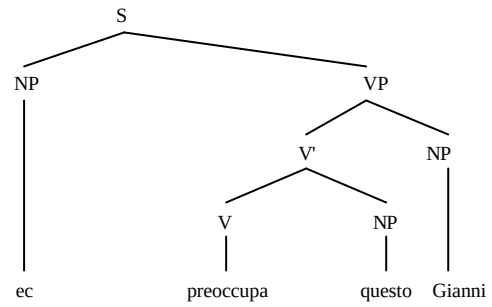
(10) Gianni$_i$ si$_i$ teme.（Belletti & Rizzi 1988:296, (10a))
'Gianni himself fears'

他の現象においても、グループ１の心理動詞は通常の動詞と同じふるまいをしており、派生を通じて常に主語が目的語を c-command していると考えるのが妥当であると、Belletti & Rizzi 1988 は結論づけた。

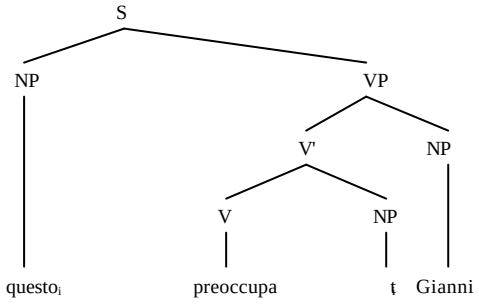
1.3. preoccupare（気にかかる）を代表とするグループ２の構造

次に、(6)の preoccupare（気にかかる）を代表とするグループ２の D-structure は(11a)、S-structure は(11b)のようになっていると分析されている。

(11) a. グループ２の場合の D-structure（Belletti & Rizzi 1988:293, (6))



b. グループ２の場合の S-structure



グループ２の動詞の場合、Theme を担う項は、(11a)の位置では格を付与されないため、S の指定部に移動しなければならない。つまり、グループ２の場合の主語は、派生の途中で主語の位置に移動してきた derived subject であると主張されている。基底構造から主語の位置にある deep subject とは異なり、derived subject は再帰代名詞を束縛できないことが知られている。(12a)は受身文、(12b)は繰り上げ構文の例である。

(12) a. *Gianni$_i$ si$_i$ è stato affidato. (Belletti & Rizzi 1988:295, (8a))
'Gianni to himself was entrusted'

b. *Gianni$_i$ si$_i$ sembra simpatico. (Belletti & Rizzi 1988:295, (8b))
'Gianni to himself seems nice'

そして、グループ２の心理動詞の場合も同様に、その主語は再帰代名詞の si を束縛することができない。

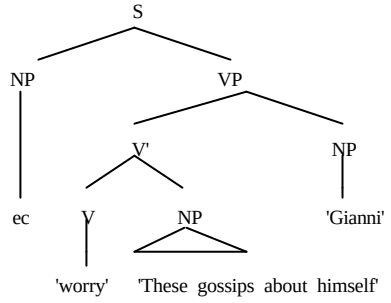
(13) *Gianni$_i$ si$_i$ preoccupa. (Belletti & Rizzi 1988:296, (10b))
'Gianni himself worries'

Belletti & Rizzi 1988 は、si は D-structure で束縛されていなければならない、としている。グループ１でもグループ２でも、S-structure では主語が si を c-command しているが、D-structure を見ると、グループ１では si が先行詞に c-command されているのに対して、グループ２では、その c-command は成り立っていない。そのため、(13)は非文法的となる。

逆に、グループ２の場合には、D-structure で Experiencer が Theme を c-command しているために、(14)のように S-structure では先行詞が再帰代名詞を c-command していない場合でも、照応関係が成立することがある。

(14) a. Questi pettegolezzi su di sè preoccupano Gianni più di ogni altra cosa.
'These gossips about himself worry Gianni more than anything else.'
(Belletti & Rizzi 1988:312, (57a))

b. D-structure:



(14b)の D-structure を見ると、主語の位置が空であり、表面上の主語である These gossips about himself が目的語の位置にきている。そして、先行詞（Gianni）が再帰代名詞（himself）より高い位置にあるので、先行詞が再帰代名詞を c-command しており、D-structure において照応関係が成立する[2]。このような現象は、非心理動詞文やグループ１の心理動詞では起こらない。

このように、グループ２は、D-structure において Experiencer が Theme を c-command し

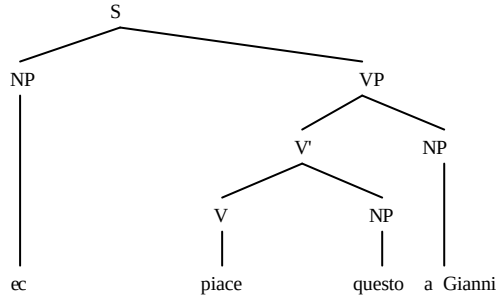
[2] Belletti & Rizzi 1988 では、照応形の束縛は D-structure または S-structure のどちらかで成り立てばよいと仮定されている。

ていると考えるのが妥当であると、Belletti & Rizzi 1988 は結論づけた。

1.4. piacere（喜ばせる）を代表とするグループ３の構造

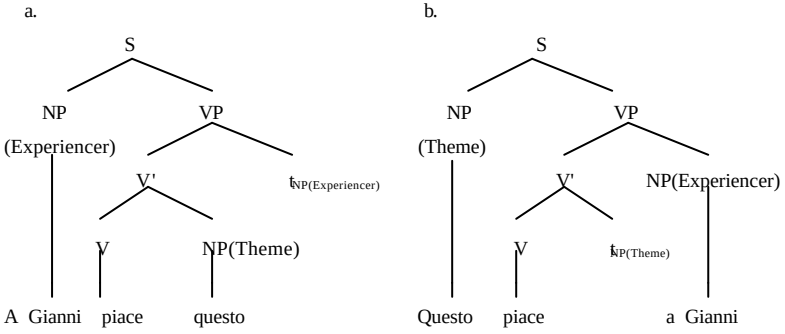
最後に、(7)の piacere（喜ばせる）を代表とするグループ３の D-structure も、グループ２の場合と同様、(15)のようになっていると分析された。

(15)　グループ３の場合の D-structure（Belletti & Rizzi 1988:293, (6))



グループ３の Experiencer は文頭に移動できる。しかし、Experiencer が移動しない場合には Theme が主格を得るため、文頭に移動する。従って、(16a,b)の二通りの S-structure がでてくる。

(16)　グループ３の場合の S-structure



このように、グループ３でも、D-structure において Experiencer が Theme を c-command していると考えるのが妥当であると、Belletti & Rizzi 1988 は結論づけた。

1.5. まとめ

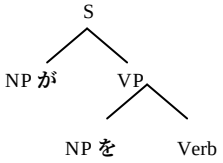
以上のように、Belletti & Rizzi 1988 は、イタリア語の心理動詞には、派生を通じて常に主語(Experiencer)が目的語(Theme)を c-command しているタイプのもの（temere（恐れる）を代表とするグループ１）と、D-structure において Experiencer が Theme を c-command しているタイプのもの（preoccupare（気にかかる）を代表とするグループ２と、piacere（喜ばす）を代表とするグループ３）があるということを提示した[3]。次に、このことを踏まえて、日本語の心理動詞はどのようなグループに分かれるかを考察していく。

[3] Belletti & Rizzi 1988 の分析に従えば、どのタイプの心理動詞でも、D-structure では Experiencer が Theme を c-command していることになり、UTAH に違反しないことになる。

2. 日本語の心理動詞

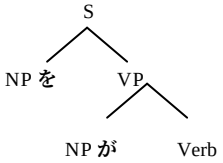
Hoji 1985 では、日本語の文の基本構造は次のようになっていると述べられた。

(17)



前章で述べたように、Belletti & Rizzi 1988 は、イタリア語の心理動詞の場合、preoccupare（気にかかる）を代表とするグループ２のように、主語が D-structure では主語の位置にない場合もあると述べている。日本語でもそのような心理動詞が存在するとしたら、次のような構造になっている可能性がある。

(18)



ここで再び(4)を見てみよう。

(4) a. *[$_{S}$ [$_{NP}$自分$_{i}$の車を壊した人]が[$_{VP}$メアリー$_{i}$を殴った]]。
b. [$_{S}$ [$_{NP}$自分$_{i}$の車を壊した人]が[$_{VP}$メアリー$_{i}$を驚かせた]]。
cf. [$_{S}$ [$_{NP}$ジョンが自分$_{i}$の車を壊したこと]が[$_{VP}$メアリー$_{i}$を驚かせた]]。（Saito and Hoji 1983, (14a)）

仮に、「驚かせる」が(18)のような構造になるタイプの動詞であると仮定すると、上であげた(4)の問題点は、次のように説明できる。(4b)は D-structure で「メアリー」が「自分」を c-command していることになり、(4a)との違いが説明できる。

では、日本語の心理動詞で、具体的にどのような動詞がどのような構造になっているのだろうか。そして(4b)のように照応関係が可能な場合、必ず(18)の構造になっていると考えるべきなのだろうか。以下では、日本語の様々な心理動詞を広く調査し、それぞれ、どのようなふるまいをするのか、詳しく調べていく[4]。

2.1. 逆行照応の可能な心理動詞と不可能な心理動詞

まず、様々な心理動詞を以下の(19)の構文に当てはめ、このような「逆行照応」が可能かどうか、文の容認性を見ていく。

(19) 逆行照応：
[$_{S}$ [$_{NP}$・・・自分$_{i}$・・・]が[$_{VP}$メアリー$_{i}$を/に・・・V・・・]]

同時に、(20)の「順行照応」が可能であるかどうかも確認していく。

(20) 順行照応：
[$_{S}$メアリー$_{i}$が・・・[$_{VP}$ [$_{NP}$・・・自分$_{i}$・・・]を/に・・・V・・・]]

「殴った」のような非心理動詞の場合、(4a)のように逆行照応は容認不可能であるが、(21)のように順行照応は容認可能である。

(4) a. *[$_{S}$ [$_{NP}$自分$_{i}$の車を壊した人]が[$_{VP}$メアリー$_{i}$を殴った]]。

(21) [$_{S}$メアリー$_{i}$が[$_{VP}$ [$_{NP}$自分$_{i}$の車を壊した人]を殴った]]。

では、心理動詞の場合は、どうなるだろうか。

---

[4] 可能な限り、むらなく動詞を集めることができるように、情報処理振興事業協会の『計算機用日本基本動詞辞書』および『計算機用日本基本形容詞辞書』を資料の母体とし、その中から、意味として心理動詞と思われるものを選んだ。

上記の資料に載っているのは、原則的に基本形だけであるが、たとえば「考える」に対して「考えさせる」「考えられる」「考えさせられる」も区別して調べていく。つまり、「考えさせる」や「考えられる」、「考えさせられる」は「考える」とひとまとめに扱うのではなく、以下の(i)のように、それぞれ別の動詞として分類を進めていく。

(i) a. *[$_{S}$ [$_{NP}$自分$_{i}$の車を壊した人]が[$_{VP}$メアリー$_{i}$のことを考えた]]。
b. [$_{S}$ [$_{NP}$自分$_{i}$の車を壊した人]が[$_{VP}$メアリー$_{i}$を考えさせた]]。
c. *[$_{S}$ [$_{NP}$自分$_{i}$の車を壊した人]が[$_{VP}$メアリー$_{i}$に考えられた]]。
d. *[$_{S}$ [$_{NP}$自分$_{i}$の車を壊した人]が[$_{VP}$メアリー$_{i}$のことを考えさせられた]]。

まず、どの心理動詞の場合も、順行照応は可能であった。それに対して、逆行照応は容認できるものとできないものの二つのグループに分かれた。以下は、非心理動詞と同じく(19)の逆行照応が容認できないグループの例文である。このグループを正位型と呼ぶことにする。正位型の例文を以下に挙げる。

(22) 順行照応

a. [$_{S}$ メアリー$_{i}$ が[$_{VP}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$ の車を壊した人]を嫌った]]。
b. [$_{S}$ メアリー$_{i}$ が[$_{VP}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$ の車を壊した人]に憧れた]]。
c. [$_{S}$ メアリー$_{i}$ が[$_{VP}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$ のいとこと結婚した人]を信じた]]。
d. [$_{S}$ メアリー$_{i}$ が[$_{VP}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$ のいとこと結婚した人]に慌てさせられた]]。
e. [$_{S}$ メアリー$_{i}$ が[$_{VP}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$ の家にいる人]を妬んだ]]。
f. [$_{S}$ メアリー$_{i}$ が[$_{VP}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$ の過去を忘れた人]に呆れられた]]。

(23) 逆行照応

a. *[$_{S}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$ の車を壊した人]が[$_{VP}$ メアリー$_{i}$ を嫌った]]。
b. *[$_{S}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$ の車を壊した人]が[$_{VP}$ メアリー$_{i}$ に憧れた]]。
c. *[$_{S}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$ のいとこと結婚した人]が[$_{VP}$ メアリー$_{i}$ を信じた]]。
d. *[$_{S}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$ のいとこと結婚した人]が[$_{VP}$ メアリー$_{i}$ に慌てさせられた]]。
e. *[$_{S}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$ の家にいる人]が[$_{VP}$ メアリー$_{i}$ を妬んだ]]。
f. *[$_{S}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$ の過去を忘れた人]が[$_{VP}$ メアリー$_{i}$ に呆れられた]]。

これに対して以下は、(19)の逆行照応が容認できるグループの例文である。このグループを逆位型と呼ぶことにする。逆位型の例文を以下に挙げる。

(24) 順行照応

a. [$_{S}$ メアリー$_{i}$ が[$_{VP}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$ の車を壊した人]を怖がらせた]]。
b. [$_{S}$ メアリー$_{i}$ が[$_{VP}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$ の車を壊した人]を考えさせた]]。
c. [$_{S}$ メアリー$_{i}$ が[$_{VP}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$ のいとこと結婚した人]を楽しませた]]。
d. [$_{S}$ メアリー$_{i}$ が[$_{VP}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$ のいとこと結婚した人]を悔やませた]]。
e. [$_{S}$ メアリー$_{i}$ が[$_{VP}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$ の家にいる人]を怪しませた]]。
f. [$_{S}$ メアリー$_{i}$ が[$_{VP}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$ の過去を忘れた人]を恥じさせた]]。

(25) 逆行照応

a. [$_{S}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$ の車を壊した人]が[$_{VP}$ メアリー$_{i}$ を怖がらせた]]。
b. [$_{S}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$ の車を壊した人]が[$_{VP}$ メアリー$_{i}$ を考えさせた]]。

c. [$_{S}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$ のいとこと結婚した人]が[$_{VP}$ メアリー$_{i}$ を楽しませた]]。
d. [$_{S}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$ のいとこと結婚した人]が[$_{VP}$ メアリー$_{i}$ を悔やませた]]。
e. [$_{S}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$ の家にいる人]が[$_{VP}$ メアリー$_{i}$ を怪しませた]]。
f. [$_{S}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$ の過去を忘れた人]が[$_{VP}$ メアリー$_{i}$ を恥じさせた]]。

では、次に、逆位型の場合の構造は(18)であると考えていいのかどうかという問題に移ろう。

2.2 「視点」

久野 1978 は、構造以外の方法で「自分」と「メアリー」の照応関係を説明している。(26)と(27)は、久野 1978 の中で仮定されている「自分」の規約である。

(26) 再起代名詞の視点規約：
複文中に現れる再起代名詞「自分」は、同じ節に現れる他のどの事物よりも「自分」の指示対象寄りの視点を表わす。
（久野 1978:206, (14)）

(27) 「自分」の話者指示的用法：
発話、思考、意識等を表わす動詞に従属する節の中で用いられる「自分」は、その発話、思考、意識の発話者、経験者を指す機能を持つ。（久野 1978:213, (30)）

久野 1978: 214 によると、「自分」という同一形式が、一方では間接話法的従属節の中で発話者、思考者、経験者を指示するのに用いられ、もう一方では話し手の視点の焦点を表わす、という事実は偶然ではあり得ない。後者の用法は、前者の用法から発達したのではないかと思われる。また、久野 1978: 224 によると、使役心理動詞構文以外の構文で、目的語の先行詞として「自分」を用いることはきわめて難しい、とある。このようなことから、「自分」＝「メアリー」と解釈できることには、構造というより意味役割（視点など）が関係していると考えられる。

次の例の対照を見ても、「自分」が視点に関わる表現であるということが示唆されている。

(28) a. 太郎は、花子が自分に貸してくれた自転車を修繕した。
b. *太郎は、花子が自分に貸してやった自転車を修繕した。

(26)の仮説によると、(28a,b)はいずれも太郎寄りの視点からの記述である。そして(28a)の

「貸してくれた」も太郎寄りの視点である。しかし、(28b)の「貸してやった」は花子寄りの視点からの記述であり、(26)と矛盾するので不適格文と判断されるというのである[5]。

この考え方に従えば、逆位型の例文は次のように説明可能である。

(25) a. [$_{S}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$の車を壊した人]が[$_{VP}$ メアリー$_{i}$を怖がらせた]]。

「怖がった」のはメアリーだから、文の視点は「壊した人」よりも「メアリー」寄りである。それゆえ、矛盾せずに「自分」＝「メアリー」と解釈できることになる。このように、逆位型の例も、構造の違いではなく、「視点」の考えで説明することができる。

正位型の場合は、非心理動詞の場合と同じように、「自分」＝「メアリー」という解釈は容認されない。

(23) a. *[$_{S}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$の車を壊した人]が[$_{VP}$ メアリー$_{i}$を嫌った]]。

(4) a. *[$_{S}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$の車を壊した人]が[$_{VP}$ メアリー$_{i}$を殴った]]。

(23a)の場合、動詞の形が「嫌った」という形であるので、「嫌った」のは、「車を壊した人」となり、文の視点が「メアリー」ではなく、「自分の車を壊した人」寄りの視点からの記述になるので、不適格文となる。また、非心理動詞のときに容認できないのは、文の視点がメアリー寄りにはならないからだと説明されている。

もし、久野の「視点」による考え方が正しいとしたら、「メアリー」が「自分」を c-command していなくても照応関係が成立することになり、逆位型の動詞を含む文の構造が必ずしも(18)にならなくてもよいことになる。しかし、それでいいのだろうか。Hoji 1985 などでは、

[5] また、Hoji 1985 には次のような久野の主張が紹介されている。以下の文は Kuno 1985 で述べられたものである。

(i) a. [$_{NP}$ 花子が自分$_{i}$を嫌っていること]が次郎$_{i}$を憂鬱にしている。（Hoji 1985:35, (15a)）

b. ??[$_{NP}$ 花子が自分$_{i}$を嫌っていること]が次郎$_{i}$を憂鬱にしているの？（Hoji 1985:35, (15b)）

久野の主張によると、(i-a)は対象の心理状態を描写しているので、心理状態の経験者と話し手の高い程度の同一化が必要である。話し手は第三者の心理状態を述べることはできないので、文はレポート形式でなく、話し手が完全に経験者と同一化する談話形式で使われるがベストである。(i-b)は違和感がある。それは、話し手が聞き手に次郎の心理がどうなっているか、ということを尋ねているからで、聞き手に次郎の心理になることを期待しているのではないからである。つまり、(i-a)と(i-b)は同じ構造をしていながら、どれだけ次郎に同一化するかにより、容認度が変わってくる。

連動読みに注目して文の構造を決定することが重要だと述べられている（同一指示に注目しても文の構造は決定できないという点に関しては Appendix 参照）。そこで、以下では「自分」の先行詞が複数の人を指す場合を観察し、すべての逆位型の心理動詞で連動読みが可能かどうかを見てみたい。

2.3. 逆行連動読みの可能な心理動詞と不可能な心理動詞

次に調べたいのは、(29)のような順行連動読みと(30)のような逆行連動読みの可能性である。

(29) 順行連動読み

[$_{S}$ メアリーとジェーン$_{i}$が・・・[$_{VP}$ [$_{NP}$ ・・・自分$_{i}$・・・]を/に・・・V・・・]]

(30) 逆行連動読み

[$_{S}$ [$_{NP}$ ・・・自分$_{i}$・・・]が[$_{VP}$ メアリーとジェーン$_{i}$を/に・・・V・・・]]

「殴った」のような非心理動詞の場合、順行連動読みは可能であるが、逆行連動読みは不可能である。

(31) 非心理動詞：

a. 順行連動読み

[$_{S}$ メアリーとジェーン$_{i}$が[$_{VP}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$の車を壊した人]を殴った]]。

b. 逆行連動読み

*[$_{S}$ [$_{NP}$ 自分$_{i}$の車を壊した人]が[$_{VP}$ メアリーとジェーン$_{i}$を殴った]]。

これは、主語が目的語を c-command していると仮定すると説明できる。

では、心理動詞の場合はどうだろうか。順行連動読みは、すべての心理動詞について可能であったので、逆行連動読みについて調べていく。まず、逆行照応が許されない正位型の場合、どれも逆行連動読みは許されない。

このグループに属する動詞には、(32)のようなものがある。

(32) 正位型の心理動詞：

嫌う、好む、考える、悲しむ、楽しむ、うれしがる、怖がる、怪しむ、憎む、妬む、恨む、なめる、諦める、悔やむ、恥じる、咎める、誇る、危ぶむ、省みる、慕う、偲ぶ、愛する、敬う、思う、信じる、悟る、嫌わせられる、好ませられる、考えさせられる、悲しまされる、楽しまされる、うれしがらされる、怖がらされ

る、怪しまされる、憎まされる、妬まされる、恨まされる、なめらされる、諦めさせられる、悔やまされる、恥じさせられる、咎めさせられる、誇らされる、危ぶませられる、省みらされる、慕わされる、偲ばされる、愛させられる、敬わせられる、思わされる、信じさせられる、悟らされる、嫌われる、好まれる、考えられる、悲しまれる、楽しまられる、うれしがられる、怖がられる、怪しまれる、憎まれる、妬まれる、恨まれる、なめられる、諦められる、悔やまれる、恥じられる、咎められる、誇られる、危ぶまれる、省みられる、慕われる、偲ばれる、愛される、敬われる、思われる、信じられる、悟られる、憧れる、酔う、しびれる、妬く、驚く、困る、焦る、苦しむ、慌てる、こだわる、怯える、とらわれる、呆れる、イラつく、揺れる、戸惑う、絶望する、憧れさせられる、酔わされる、しびれさせられる、妬かされる、驚かされる、困らされる、焦らされる、苦しまされる、慌てさせられる、こだわらせられる、怯えさせられる、とらわさせられる、呆れさせられる、イラつかされる、揺れさせられる、戸惑わされる、絶望させられる、憧れられる、酔われる、しびれられる、妬かれる、驚かれる、困られる、焦られる、苦しまれる、慌てられる、こだわられる、怯えられる、とらわれる、呆れられる、イラつかれる、揺れられる、戸惑わられる、絶望される　等

以下に正位型の例文を挙げる。

(33)　順行連動読み

a.　[$_S$メアリーとジェーン$_i$が[$_{VP}$ [$_{NP}$自分$_i$の車を壊した人]を嫌った]]。

b.　[$_S$メアリーとジェーン$_i$が[$_{VP}$ [$_{NP}$自分$_i$のいとこと結婚した人]に怯えられた]]。

c.　[$_S$メアリーとジェーン$_i$が[$_{VP}$ [$_{NP}$自分$_i$の家にいる人]を敬った]]。

d.　[$_S$メアリーとジェーン$_i$が[$_{VP}$ [$_{NP}$自分$_i$の過去を忘れた人]に困られた]]。

(34)　逆行連動読み

a.　*[$_S$ [$_{NP}$自分$_i$の車を壊した人]が[$_{VP}$メアリーとジェーン$_i$を嫌った]]。

b.　*[$_S$ [$_{NP}$自分$_i$のいとこと結婚した人]が[$_{VP}$メアリーとジェーン$_i$に怯えられた]]。

c.　*[$_S$ [$_{NP}$自分$_i$の家にいる人]が[$_{VP}$メアリーとジェーン$_i$を敬った]]。

d.　*[$_S$ [$_{NP}$自分$_i$の過去を忘れた人]が[$_{VP}$メアリーとジェーン$_i$に困られた]]。

次に、逆位型の心理動詞を調べてみると、逆行連動読みができるものとできないものとがある。そこで、逆行照応、逆行連動読みの両方が可能である動詞のグループを真性逆位型と呼ぶことにしよう。真性逆位型の心理動詞には、(35)のようなものがある。

(35)　真性逆位型の心理動詞：

怖がらせる、考えさせる、悲しませる、楽しませる、うれしがらせる、驚かせる、苦しませる、イラつかせる、絶望させる　等

真性逆位型の場合の例文を以下に挙げる。

(36)　順行連動読み

a.　[$_S$メアリーとジェーン$_i$が[$_{VP}$ [$_{NP}$自分$_i$の車を壊した人]を怖がらせた]]。

b.　[$_S$メアリーとジェーン$_i$が[$_{VP}$ [$_{NP}$自分$_i$のいとこと結婚した人]を考えさせた]]。

c.　[$_S$メアリーとジェーン$_i$が[$_{VP}$ [$_{NP}$自分$_i$の家にいる人]を絶望させた]]。

d.　[$_S$メアリーとジェーン$_i$が[$_{VP}$ [$_{NP}$自分$_i$の過去を忘れた人]をイラつかせた]]。

(37)　逆行連動読み

a.　[$_S$ [$_{NP}$自分$_i$の車を壊した人]が[$_{VP}$メアリーとジェーン$_i$を怖がらせた]]。

b.　[$_S$ [$_{NP}$自分$_i$のいとこと結婚した人]が[$_{VP}$メアリーとジェーン$_i$を考えさせた]]。

c.　[$_S$ [$_{NP}$自分$_i$の家にいる人]が[$_{VP}$メアリーとジェーン$_i$を絶望させた]]。

d.　[$_S$ [$_{NP}$自分$_i$の過去を忘れた人]が[$_{VP}$メアリーとジェーン$_i$をイラつかせた]]。

これに対して、逆行照応は可能であるのに逆行連動読みは容認されない動詞のグループを擬似逆位型と呼ぶことにする。擬似逆位型の動詞には、(38)のようなものがある。

(38)　擬似逆位型の心理動詞：

悔やませる、憎ませる、怪しませる、好ませる、嫌わせる、妬ませる、恨ませる、なめらせる、諦めさせる、恥じさせる、咎めさせる、誇らせる、危ぶませる、省みらせる、慕わせる、偲ばせる、愛させる、敬わせる、思わせる、信じさせる、悟らせる、憧れさせる、酔わせる、しびれさせる、妬かせる、困らせる、焦らせる、慌てさせる、こだわらせる、怯えさせる、とらわらせる、呆れさせる、揺れさせる、戸惑わせる　等

以下に擬似逆位型の場合の例文を挙げる。

(39)　順行連動読み

a.　[$_S$メアリーとジェーン$_i$が[$_{VP}$ [$_{NP}$自分$_i$の車を壊した人]を悔やませた]]。

b.　[$_S$メアリーとジェーン$_i$が[$_{VP}$ [$_{NP}$自分$_i$のいとこと結婚した人]を慕わせた]]。

c.　[$_S$メアリーとジェーン$_i$が[$_{VP}$ [$_{NP}$自分$_i$の家にいる人]を信じさせた]]。

d. [$_S$メアリーとジェーン$_i$が[$_{VP}$ [$_{NP}$自分$_i$の過去を忘れた人]を省みらせた]]。

(40) 逆行連動読み

a. *[$_S$ [$_{NP}$自分$_i$の車を壊した人]が[$_{VP}$メアリーとジェーン$_i$を悔やませた]]。

b. *[$_S$ [$_{NP}$自分$_i$のいとこと結婚した人]が[$_{VP}$メアリーとジェーン$_i$を慕わせた]。

c. *[$_S$ [$_{NP}$自分$_i$の家にいる人]が[$_{VP}$メアリーとジェーン$_i$を信じさせた]]。

d. *[$_S$ [$_{NP}$自分$_i$の過去を忘れた人]が[$_{VP}$メアリーとジェーン$_i$を省みらせた]]。

まとめると、日本語の心理動詞には、次の３つのグループがあることになる。

(41) a. **正位型**：逆行照応の解釈、逆行連動読みの解釈が共に容認できないもの

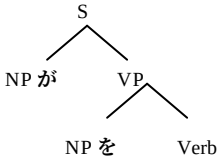
b. **真性逆位型**：逆行照応の解釈、逆行連動読みの解釈が共に容認できるもの

c. **擬似逆位型**：逆行照応の解釈は容認できるが、逆行連動読みの解釈はできないもの

それでは、３つのグループそれぞれの場合の節構造はどのようになっていると考えるべきだろうか。

正位型の心理動詞は、非心理動詞と同じく、逆行照応、逆行連動読みが共に容認できないので、次のような節構造だと考えられる。

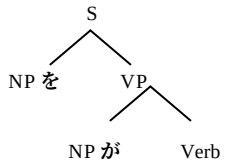
(42)



このタイプの動詞の場合、派生を通していずれの段階においても「NP を」が「NP が」を c-command することはないので、逆行照応や逆行連動読みが成立することはない。

次に、**真性逆位型**は、逆行照応、逆行連動読み共に容認できる。それゆえ、このグループの構造は、(43)のようになると考えるべきである。

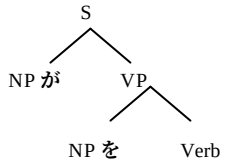
(43)



この場合、Belletti & Rizzi 1988 の preoccupare （気にかかる）を代表とするグループ２の構造と同じように、「NP を」が「NP が」を c-command しているので、逆行照応や逆行連動読みが成り立つことが説明できる。

これに対して、**擬似逆位型**は、逆行照応は容認できるが逆行連動読みはできないものである。もし、このタイプの動詞も(43)のような構造であると仮定すると、逆行連動読みが不可能であることが説明できない。そこで、構造としては、(42)の正位型と同じであると考え、「自分」と「メアリー」との照応関係については、必ずしも c-command が必要条件ではなく、むしろ、久野 1978 の「視点」が関わる現象であると考えたい。

(42)



つまり、このグループの動詞が使われると、文が Experiencer 寄りの視点からの記述となり、構造としては「NP を」が「NP が」を c-command していなくても、逆行照応が可能になるのである。しかし、逆行連動読みの場合は、「NP を」が「NP が」を c-command していることが必要条件であると考えると、擬似逆位型の場合は逆行連動読みができないことが説明できる。

3. 最後に

この論文では、具体的に様々な心理動詞のふるまいを調べることによって、その構造の特異性の一端を明らかにした。特に注目したのは、(19)のような逆行照応が可能かどうか、そして、(30)のような逆行連動読みが可能かどうかということである。

(19) 逆行照応：

[$_{S}$ [$_{NP}$・・・自分$_{i}$・・・]が[$_{VP}$メアリー$_{i}$を/に・・・V・・・]]

(30) 逆行連動読み

[$_{S}$ [$_{NP}$・・・自分$_{i}$・・・]が[$_{VP}$メアリーとジェーン$_{i}$を/に・・・V・・・]]

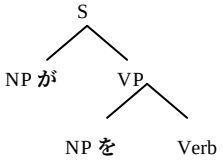
その結果、心理動詞には３つのタイプがあることがわかった。**正位型**：逆行照応の解釈、逆行連動読みの解釈が共に容認できないもの、**真性逆位型**：逆行照応の解釈、逆行連動読みの解釈が共に容認できるもの、**擬似逆位型**：逆行照応の解釈は容認できるが、逆行連動読みの解釈はできないもの、の３タイプである。

(44)

	逆行照応の解釈	逆行連動読みの解釈
正位型	できない	できない
真性逆位型	できる	できる
擬似逆位型	できる	できない

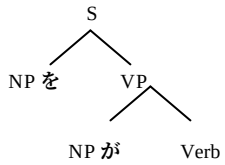
正位型は、逆行照応や逆行連動読みが成立することはないので、派生を通していずれの段階においても「NP を」が「NP が」を c-command することはなく、(42)のように、普通の動詞と同じ節構造と考えられる。

(42)



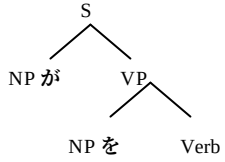
真性逆位型は、逆行照応、逆行連動読み共に容認できる。それゆえ、このグループの構造は、(43)のようになると考えるべきである。

(43)



これに対して**擬似逆位型**は、逆行照応は容認できるが逆行連動読みはできないものである。もし、このタイプの動詞も(43)のような構造であると仮定すると、逆行連動読みが不可能であることが説明できない。そこで、「自分」と「メアリー」との照応関係については、必ずしも c-command が必要条件ではなく、久野 1978 の「視点」が関わる現象であると考える。構造としては、(42)の正位型と同じく、普通の動詞と同じ節構造である。

(42)



これまでの研究では、心理動詞の中に逆行照応が可能なものがあることは知られていたが、具体的にどのような動詞が逆行照応を許すのか、包括的な研究は行われてこなかった。また、この論文では、逆行照応が可能な動詞（逆位型）の中にも、逆行連動読みができるものとできないものがあることを示し、逆位型でも構造としては通常の動詞の構造と同じものがあるということを指摘した。

Appendix. 同一指示と文の構造

2.2 節で Hoji 1985 などでは、連動読みに注目して文の構造を決定することが重要だと述べられているが、Hoji 1985 では初めに、代名詞と固有名の同一指示関係を用いて日本語の「二項枝分かれ」構造について説明しようとした。しかし、日本語におけるかき混ぜがあるという事実から、十分な説明ができなかった。以降でどのように十分ではなかったのか紹介する。

代名詞が固有名と同一指示の関係になれるかどうかには、(45)の条件が関わっていることが知られている。

(45) X cannot be an antecedent of Y if Y c-commands X. （Hoji 1985:3, (3)）
（もし、Y が X を c-command しているなら、X は Y の先行詞になれない。）

(45)の制約には(46)の Reinhart 1976 の first branching の c-command の定義が関係している。以下にそれを示す。

(46) X c-command Y if neither dominates the other and the first branching node that dominates Y.
（もし、X と Y がお互いを支配せず、X を支配する最初の枝分かれ節が、Y を支配するなら、X が Y を c-command する）

(45)をふまえて、次の文を見てみる。

(47) a. *彼$_i$が[$_{VP}$（自分で）ジョン$_i$の先生を紹介した]。（Hoji 1985:4, (5a)）
b. ?ジョン$_i$の先生が[$_{VP}$（自分で）彼$_i$を紹介した]。（Hoji 1985:4, (5b)）

(48) a. ジョン$_i$が[彼$_i$の母]を責めた（こと）。（Hoji 1985:4, (6a)）
b. [彼$_i$の母]がジョン$_i$を責めた（こと）。（Hoji 1985:4, (6b)）

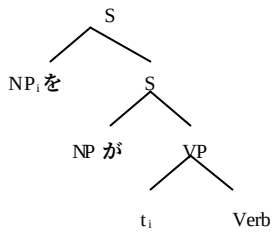
(48b)で同一指示が可能であることからもわかるように、(47a)は「彼」が「ジョン」に先行しているから、同一指示ができないのではない。また、(47b)が(2)のように「三項枝分かれ」の構造をしているとすれば、主語 NP と目的語 NP が sister となり、「彼」が「ジョン」を c-command するので、(45)より同一指示が不可能になる。逆に、日本語が(2)のように「二項枝分かれ」の構造をしているとすれば、「彼」が、「ジョン」を c-command していないので、同一指示が可能である。以上より、日本語の構造が「二項枝分かれ」であると言える。

では、(49)の構造はどうなっているだろうか。

(49) 本をジョンが買った。（Hoji 1985:6, (9)）

このようなかき混ぜ文は、S-structure で次のような構造をしている。

(50)



（Hoji 1985: 7, (12)）

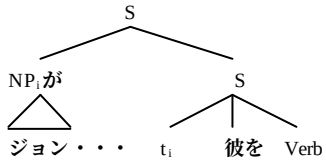
ここで、「NP を」が文頭に移動できるなら、「NP が」も文頭に移動できるのではないか、と考えるかもしれない。しかし、それが S-structure で可能だとすると、代名詞の同一指示に基づいて日本語に VP 節点があることを説明した Whitman 1982、Saito 1983 の主張を弱めてしまう。また、日本語に VP 節点がないと考えても、(47b)のような例において、代名詞の同一指示を説明することができる。

それが次の(51)の文である。

(51) ?ジョン$_i$の先生が[$_{VP}$（自分で）彼$_i$を紹介した]。（Hoji 1985:8, (14)）

以下に(51)の D-structure を示す。

(52)



（Hoji 1985:9, (15)）

(52)で示したように(51)は、D-structure で「彼」は「ジョン」を c-command しているので「ジョン」は「彼」の先行詞になれず、「三項枝分かれ」でも説明できてしまう。しかし、

Chomsky 1981 より、(45)は S-structure の構造のみを問題にしているので(52)のように D-structure で c-command していても関係ない。

(53)の文は、どちらの語順でも表すことができる。つまり、日本語では、主語 NP と目的語 NP の語順は自由であり、かき混ぜ（Scrambling）がないということはできない。

(53) a. ジョンがビルに本を送った。（Hoji 1985:11, (18a)）

b. ジョンが本をビルに送った。（Hoji 1985:11, (18b)）

これらは両方の語順が D-structure で許されている、もしくは、１つの語順が D-structure 与えられ、もうひとつは統語的移動による「派生」であると考えられる。D-structure では代名詞「彼」は「NP に」を c-command するが、S-structureでは「NP に」の VP 付加のため、c-command しない。主語 NP がかき混ぜのないときのみ、代名詞の同一指示の事実を用いて、VP 内の「二項枝分かれ」構造を仮定することができる。つまり、日本語において、代名詞の同一指示（Coreference）の事実だけでは、「二項枝分かれ」構造を主張することはできないのである。

＊本論文の執筆にあたり、指導教官である上山あゆみ先生には、ご多忙の中、丁寧なご指導をしていただきました。心より感謝いたします。また、九州大学大学院生の田中大輝氏、團迫雅彦氏、水本豪氏には数多くの貴重なアドバイスをいただきました。ここに深い感謝の意を表します。

参考文献

1. 久野暲 (1978) 『談話の文法』大修館書店.
2. 原田信一 (1977) 『日本語に「変形」は必要だ』 言語 vol.6-11, pp.88-95, 大修館書店.
3. 『計算機用日本基本動詞辞書』情報処理振興事業協会
4. 『計算機用日本基本形容詞辞書』情報処理振興事業協会
5. Belletti, Adriana & Luigi Rizzi (1988) "Psych-Verbs and Theta-Theory," *Natural Language and Linguistic Theory* 6-3, pp.291-352.
6. Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris Publications, Dordrecht.
7. Farmer, A. (1980) *On the Interaction of Morphology and Syntax*, Doctoral dissertation, MIT.
8. Grimshaw, J. (1987) "Psych-Verbs and the Structure of Argument Structure," unpublished manuscript, Brandeis University.
9. Hale, K. (1980) "Remarks on Japanese Phrase Structure. Comments on the Papers on Japanese Syntax," in Y. Otsu and A Farmer, eds., *MIT Working Papers in Linguistics* vol.2, pp.185-203.
10. Hoji, H. (1985) *Logical Form Constraints and Configurational Structures in Japanese*, Doctoral dissertation, University of Washington.
11. Kageyama, T. (1997) *Verb Semantics and Syntactic Structure*, Linguistics Workshop Series; 4, Kurosio Publishers, Tokyo.
12. Kuno, S. (1985) "Anaphora in Japanese," a paper presented at a Japanese Syntax Workshop at La Jolla, California.
13. Postal, P. (1971) *Cross-Over Phenomena*, Holt, Rinehart and Winston, New York.
14. Reinhart, T. (1976) *The Syntactic Domain of Anaphora*, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge.
15. Saito, M. (1983) "Comments on the Papers on Generative syntax," in Y. Otsu, et al. eds., *Studies in Generative Grammar and Language Acquisition*, ICU, Tokyo.
16. Saito, M and H. Hoji (1983) "Weak Crossover and Move α in Japanese," *Natural Language and Linguistic Theory* 1-2, pp.245-259.
17. Whitman, J. (1982) "Configurationality Parameters," ms., Harvard University.